



スリランカでは、現地の子どもたちと折り紙や歌などで交流。中学3年の橋本彩良さんは「国際協力にずっと興味があったので貴重な経験でした」



マレーシアのスタディーツアーでは、コタキナバルで環境保護の取り組みなども視察。「おなかを壊したりもしたけど、それも含めていい思い出です」と生徒たち

「グローバルスタディーズ」も、そんな中安先生の発案で始まった科目だ。「自分で情報を取捨選択しながら知識を深めて、視野を広げてほしい」。英語とICTを組み合わせて、国際協力を学ぶという新しいスタイル。現場で活躍する人を招き、講演をしてもらうこともある。

山梨英和での学びを通じて、生徒たちは確実に変わり始めている。「英語を勉強して、もっと世界のことを学べるようになりたい」。その目を輝かせながら話してくれた。未来を担う頼もしい女性たちが山梨英和で育ち、社会に羽ばたいていく。

世界とつながる教室

グローバルな視点で羽ばたく

古くから英語教育に力を入れてきた山梨英和中学校・高等学校。今年度新設された「グローバルスタディーズ」の授業には、生徒たちが「世界とつながる」ための工夫が散りばめられている。



iPadを使ってMDGsについて調べる生徒たちと吉野先生。自分自身で調べることで、理解が深まる

丘の上にたたずむ歴史ある学校

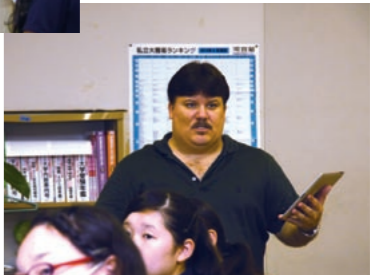
7月の3連休の初日、東京からの特急電車は、大きな旅行かばんを抱えた観光客でにぎわっていた。そんな中、向かった先は山梨県甲府市。甲府駅で下車し、前方にたたずむ愛宕山に向かって5分ほど歩いた小高い丘に、山梨英和中学校・高等学校は立っている。

その名前に聞き覚えのある人もいるかもしれない。そう、この学校は、NHKの朝の連続テレビ小説『花子とアン』の主人公、村岡花子がかつて教べんを執った学校。1889年に山梨英和女学校として産声を上げ、キリスト教の教えに基づいた女子教育を推進。村岡花子の生涯からも分かるように、英語教育にも積極的な学校だ。

「おはようございます！」
校内に入ると、生徒たちが元気よくあいさつしてくれた。これから1時間目の授業が始まるころ。高校1年生の教室には、約20人が机を並べてチャイムが鳴るのを待っていた。少人数教



グローバルスタディーズの英語を担当する糟谷先生とミュレル先生。「生徒たちには国境にとらわれずに世界に羽ばたいてほしい」



大きなスクリーンに映し出されるアフリカの地図。視聴覚教材を多用することによって、生徒たちも理解しやすくなる



育もこの学校の売りの一つだ。「今日はミレニアム開発目標『Millennium Development Goals』について勉強します」。英語科の糟谷理恵子先生の声に耳を傾ける生徒たち。土曜の1、2時間目は「グローバルスタディーズ」。今年度から始まった、開発途上国の課題や国際協力について学ぶ科目だ。「MDGsは持続可能な開発『sustainable development』を指すものです」。MDGsの8つの目標について、糟谷先生とカナダ出身のクレイグ・ミュレル先生が英語で説明し、生徒たちが復唱する。

続いて教壇に立ったのは、社会科の

吉野華恵先生だ。「それでは次に、MDGsの中で達成が近い目標、遅れている目標について調べてみましょう」。今年の3月まで現職参加制度を使って、青年海外協力隊としてマラウイで活動していた吉野先生。「世界のことを子どもたちによりリアルに伝えたいと思い、協力隊に参加しました」と話す。自身の経験を交えながら、途上国の現状や日本の国際協力について伝える。それが彼女の役割だ。

総合的にグローバル人材を育てる

MDGsの達成状況を調べるために、

生徒たちが取り出したのはiPadだ。ICT教育の一環として、県内でもいち早くiPadを授業に取り入れた山梨英和。高校1年生にとってはもう3年目だ。授業で使う資料はネットワーク上で管理されているため、予習復習が効率よくできる。

「iPadの導入を通じて、英語や国際理解教育の強化を目指しています」。そう話すのは、今年の3月まで教頭を務めていた中安隆信先生。実は中安先生も、青年海外協力隊の経験者。今から30年以上も前、ケニアの奥地の村で、理科教師として活動していた。「サラリーマンをしていた頃、電車の中吊りで説明会のポスターを偶然見つけて、引き寄せられるように応募しました」。帰国後は教員になり、国際理解教育の普及に努めてきた。

あつという間に、この日の授業も終盤。吉野先生は、自身がマラウイで撮影してきた写真をスライドに映した。HIV/エイズなどの感染症で命を落としてしまう人がいること、女性たちは仕事を獲得するのが難しいこと、貧しくて学校に通えない子どもたちがたくさんいること……。現地の人たちの明るい笑顔に影を落としている問題を、自分ごととして考えてほしい。吉野先生が現地で出会った人たちのストーリーを、生徒たちはじっと聞いていた。

教室での学びだけではない。山梨英和では、カナダやオーストラリアでの語学研修に加え、マレーシアやスリランカでJICAボランティアやNGOなどの活動を視察するスタディーツアーに参加するチャンスもある。「テレビで見ていた貧困や環境の問題が、マレーシアに行っただけで一気に身近になりました。私にもできる国際協力を探していきたい」と高校1年の望月海帆さん。慣れない気候や食べ物、ひたすら続く道ばたの道路など、日本では経験のないことばかり。さまざまな方向から「世界」に触れてほしい。それが先生たちの願いだ。